

偶然を破壊し世界を漂白する愛の使者

—桜井孝身のこと

ヨシダ・ヨシエ

唐代に丹霞（たんか）という型破りの禅師がいた。ある極寒の日、訪れた京洛の寺の本堂から、木仏像を持ちだして焚火をした。おどろいた院主がその無暴をなじると、「なあにわしはこの仏を焼いて舍利（しゃり）を頂戴しようとおもってな」。院主は一層激怒して言った。「なにを申される。木仏にどうして舍利がありますか」とすると丹霞は涼しい顔をして答えたという。「なに、舍利もないのか。それではただの木片ではないか」

多くの禅話をのこした、もと南禅寺管長だった柴山全慶師の著者にあった話である。

無闇矢鱈に仏像を焼かれてしまったら、問題でもあろうが、柴山師も言っておられるが、偶像的なものを徹底的に打破するこうした透徹性というものは、そのまま無礙自在な創造力に通底してゆくものである。

桜井孝身というなつかしい匂いのする男のことを考えていたら、突然この話を思い出してしまったのである。桜井とは無関係な話であるが、しかしどこかでつながっているような気もするのだ。そういえば近年の桜井には、どこか ZEN AVANT-GARDE とでも呼びたいようなアトモスフェールなどという、それはちごうとりますタイと怒るかもしれぬ。それなら、これまたなつかしいことばだが、エタ・ゲーム（魂の状態）がゼンゼンエイなのだ。昔の、というのは三十六、七年も昔なのだが、その頃の桜井孝身は焼酎を吸いあげる毛むくじゃらの小型バキューム・カーみたいな男で目が血走っている印象だった。その後、サンフランシスコに住み、ヒッピーのフラワー・カルチャーがヘイト・アシュベリーをドラッグの香りで埋めつくした時代をさかいに、エロスのやさしい花を育くみ、慈悲ぶかい仏の目指しに変化してきたのである。アンチ東京の過激派である九州派の親分の桜井金剛夜叉明王が、須弥山（しゅみせん）上空の兜率天（とそつてん）をゆらりと飛翔する弥勒（みろく）菩薩に化身されたというところか。そして、この途方もないやさしさが、桜井孝身の宇宙にたいする愛なのであり、それは自分自身のエロスをコスモスとコレスポンデンスさせたのであり、その愛の記号が目と翼なのである。ギリシア神話によれば、生まれついてから白髪で、老婆の意味を持つグライアイの眼と歯を奪って、ペルセウスが、この波の歯である白い波頭の魔物を退治するが、歯を猛々しい力とすれば、目は内的な力象徴である。そして目をおびただしく描く時、画家は、すべての事象の奥をみる内的な力と同時に、つねにみられつづけている恐怖とともにあるとあっていい。みることによって描き、描かれたことによって、みられつづける。そしてなによりも魂の飛翔（エレヴァション）の象徴としての翼が空間に羽搏きつづけるのである。しかもその翼は、肉体についているものではなく、無を、あるいは穴を虚の身体としているのである。

ここには現実と願望、エクスタシーと辻潤ふうにいえばデスペラ、エロスとタナトスといった矛盾相剋の要素が、二項対立的な発想を超えて、それこそ禅的にいうならば、それぞれ

があらわれる根源ともいふべき、ゆたかな相貌をもって表出されてくるのである。

偶像を破壊することによって、みずからのなかに仏を蘇生させ、すべての存在のなかに太陽の慈悲を享けた仏身をみいだすことによって、世界を共有すると同時に無化させる。存在と穴のあいた状態と宣言する桜井孝身が、そこから現れてくるように見える。

そこには、みずからの客体化としての芸術のマテリアルな現状を漂白してしまい、ビッグバン以来、膨大にひろがりつつある巨大な穴である存在のすべてに精霊をみいだそうとする原初のひとびとが感じとっていたアニミスティックなエクスタシーをよみがえらせようとしているのだと、わたしにはおもわれて仕方がないのである。